

初期の村研

小池基之

「村研」つまり村落社会研究会が設立されたのは昭和二八（一九五三）年一月のことであった。原案には村落社会研究会という会名があげられていたが、設立準備会で村落社会研究会と決定したということである。「研究通信」を読みかえしてみると——この小文は「研究通信」と記憶をたよりに書いているので、そこからしても「研究通信」の覆刻は大変有難いことであった——第三号に、その年の五月一七日におこなわれた宿題委員会の記事があつて、そこに私が出席しているので、私が入会したのはその年の四月一八日から五月一七日の間であるということになる。社会学関係の人達がまず中心になつて創立準備をすすめられ、会則にもあるように（D会員及会務）「共同の研究活動を希望する諸科学分野の研究者をひろく含める」という主旨から、社会学以外の研究者にも次第に共同研究活動への参加がよびかけられたのである。

大会は共同討論大会とよばれていて、第一回大会の宿題は「農地改革の村落構造に及ぼした影響」というのであった。そしてその年の一〇月一三日東北大學においておこなわれた。その成果は年報第二集におさめられているが、それに先立つ年報第一集は「村落社会研究の成果と課題」と題して、その年の一二月末原稿〆切といふことで、大会準備と並行してすすめられた。ところで年報第一集の「理論と方法」の経済学の項を私が書くことになっていたのが（「通信」第三号）、途中で変更になった（「通信」第九号）のは、私のフランス留学が急遽決定して、その年の九月に出発することになったからで、したがって第一回の村研大会には私は出席していない。

私がはじめて大会に出席したのはフランス留学から帰つてからの第三回大会以後で、「農村人口の変動と家族の構造」という課題を掲げたこの第三回大会に私は「農村生産力と農村過剰人口」と題して、福島県東白川郡の事例を中心として、報告した。この大会は毎日新聞社の後援のもとに、昭和三〇年一〇月一八日同新聞大阪本社講堂で開催された。報告原稿をかかえて、桜橋から堂島に向う途には、折柄小雨がしとしと降つていた。

こんなことを振返つて思いおこしていると、初期の「村研」には二つの大きな特徴がみられるようと思われる。その一つは、大会が必ずしも合宿という形をとつていいこと、も一つは共同討論大会というより方が具体的に示していいる如く、大会が共同討論という一点にしばられていたことである。「村研」という学会は「むら」を研究対象とする学会だけあって、共同体的色合いの濃いことを感ずるし、そこにまた多分に「村研」の「良さ」を見出すものである。たとえば、元來「村研」大会には閉会の挨拶などというものではなくて、懇親会は、興あれば留まり、興尽くれば自ら散づるといふものであった。そしてこのような村研「共同体」がその紐帶とするところは、まさに、宿題として提示された共通課題をめぐる共同討論であったというべきである。

昭和三二年一月二三日・二四日東京大学でおこなわれた第五回大会で、はじめて会期を二日に延長し、共通課題とならんと自由課題報告を設けることになった。会員数の増加とともに、限定された課題にとらわれない、自由な研究発表の場を設けることの要望に

應えたものであった。これをいわば過渡的な形態として、翌第六回では宿泊大会という形がとられることになる。その意図は「一切の制約から離れて」、「くつろぎながら時間の経過も忘れて討論を行えば必ずや実り多い大会を期待できる」であろうし、また「こうしたところに村研本来の姿を再び見出すことも出来るかと思」う（『研究通信』第二八号）というところにあって、その企画は充分に達成されたように思われる。そして、その年の共通課題は、奇しくも「村落共同体」であったのである。

それ以来、「村研」大会は参加研究者会員が合宿し討論を交すといふ、きわめてユニークな形が定着することになる。このような点で、鳴子温泉「農民の家」でおこなわれた第六回大会（昭和三年一〇月七・八日）は「村研」にとって劃期的な意義をもつものであった。

もつともこののような企画の根底には、「通信」第二八号が「集団全体の性格が形式化され」るという形で表現しているような、すこしオーバーな云い方をつかって差支えなければ、「村研」自体が当面していたある意味での「危機」からの、脱却という問題があつたことは、否定しえない。だが、会員各自の専攻領域が広汎間に亘り、かならずしもつねに共通課題に焦点が合うとはいえないこと、また共通課題にしても、歴史と現状分析、社会学・法学・経済学等々から接近といつたとをあまねく配慮することの難しさは、覆うべくもない。それだけに、こうした宿泊大会といった形態が定着化するにつれて、「紐帶」がこのような形態 자체に、より多く倚りかか

るようになりはしないか、ということを気にしないではいられない。もちろん、私は宿泊大会といった形を否定するものではけっしてない。むしろ、このような形は「村研」独自の大会のあり方として、今後もずっと継続されることを切に望むものである。そのうえで、大会を、会員各自の専門分野における独自の研究成果を縦横に発表する機会とすると同時に、「宿題」——これは極めて含蓄のある表現であると思うが——として宿題委員会において充分検討され、提示された共通課題をめぐっての、自分の専門にこだわらない自由な討論の場たらしめることを、すなわち、かつては大会は「共同討論大会」であったこと——村研「共同体」の紐帶はまさにそれだと思うのだが——の意義を、宿泊大会という独自の形態を存分に生かす意味でも、再び初心にかえつて検討してみてもいいのではないかのか。

ともあれ、年報は時潮社版、培養房版、それに今回の御茶の水書房刊行の分を含めて二〇巻を数えるにいたったし、『研究通信』も百号になった。御同慶に堪えない。

会員諸君、今後も大いになお一層頑張りましょう。